

《卒論報告》

成長過程と書き文字の変容

数本好慧

1、問題の所在と本研究の目的

最初に字を習ったときから、全く変わらない字を書き続ける人はほとんどいない。私たちは、日常に見る文字から意図的・非意図的に学習し、文字を変化させている。学習者が、日常で見る教師や友人の文字から学習するのであれば、彼らがどのような文字を書くのかは大きな意味を持つ。

本研究では、心理学で考えられる人間の発達変化と、大学生に行った文字に関して他者から受けた影響についてのアンケートから、学習者の書き文字の変化の傾向を見る。そしてそれらを踏まえ、より効果的な書字指導について考えていく。

2、研究方法

本研究の目的を達成するため、以下の4つの手順で研究を進める。

- (1)人間の心理・発達と書字の関係性を示したうえで、心理学で考えられている発達の仕方や他者との関係性の変化についてまとめる。
- (2)(1)をもとに、発達に伴う書き文字の変化(誰に、いつ、どのような影響を受けたか)を予想する。
- (3)文字に関して受けた影響についてアンケートを行い分析する。対象は横浜国立大学教育学部必修科目「小教専国語」受講者 114 人とし、質問紙法により調査を行った。調査項目は表 1 の通りである。

表 1 調査項目

1	自分の字が他者から影響を受けた経験の有無
2	最も影響を受けた経験について ①いつ ②誰から ③どのように
3	2 番目に影響を受けた経験について ①いつ ②誰から ③どのように
4	3 番目に影響を受けた経験について ①いつ ②誰から ③どのように

- (4)現在の書字指導における課題と、(3)までの結果を照らし合わせ、効果的な指導を考える。

3、論文の構成

- 第 1 章 人間の発達過程と書き文字の変化の関係について
- 第 2 章 成長による文字の変化に関するアンケート
- 第 3 章 学習者の発達と書き文字の変化を踏まえての指導

4、研究の成果

第 1 章では書き文字と関係がある社会化志向性・個性化志向性の存在や、大人から独立し、友人と関係性を築いていく発達変化について整理した。そして、きれいに書く意識と個性的に書く意識が交互に訪れる、学習者に影響を与える人物が教師や母から友人へと変化していく、等と予想をした。

第 2 章では、文字に関して他者から影響を受けたと感じる人が多いこと、発達変化や他者との関係性と書き文字の変化にはある程度の相関が見られること等がわかった。また、書き文字の変化には学習環境や個人の性質も関わることがわかった。

第 3 章では「中高生での字形の低下」という課題を取り上げ、二章までの結果より、互いの字を見合う活動や、教師の文字意識を高めることがより効果的な指導につながると示した。

今回は自らを振り返るアンケートのため、実際に文字が変化していたのか確かでない。今後は、実際に書いていた文字から変化を見る必要がある。

文献

- 青山浩之・當波ゆう子(2004)「国語科書写指導における個性化とその方策」『書写書道教育研究』第 18 号、pp13-18
- 須藤春佳(2014)「友人グループを通してみる思春期・青年期の友人関係」『神戸女学院大学論集』第 61 巻 1 号、pp115-116